maestoso

斎藤隆夫　軍国日本の行方を質す　反軍演説

一九四〇年（昭和一五年）二月二日
第七五回帝国議会における質問演説より（抄録）

①

世界の歴史は全く戦争の歴史である。現在世界の歴史から、戦争を取り除いたならば、残る何物があるか。そうして一たび戦争が起こりましたならば、もはや問題は正邪曲直の争いではない。是非善悪の争いではない。徹頭徹尾力の争いであります。強弱の争いである。強者が弱者を征服する、これが戦争である。正義が不正義を膺懲（ようちょう）する、これが戦争という意味ではない。第一次ヨーロッパ戦争に当りましても、ずいぶん正義争いが起こったのであります。ドイツを中心とするところの同盟側、イギリスを中心とするところの連合側、いずれも正義は我に在りと叫んだのでありますが、戦争の結果はどうなったか。正義が勝って不正義が敗けたのでありますか。そうではないのでありましょう。正義や不正義はどこかへ飛んで行って、つまり同盟側の力が尽き果てたからして投げ出したに過ぎないのであります。今回の戦争に当りましても相変らず正義論を闘わしておりますが、この正義論の価値は知るべきのみであります。つまり力の伴わざるところの正義は弾丸なき大砲と同じことである。羊の正義論は狼の前には三文の値打もない。ヨーロッパの現状は幾多の実例を我々の前に示しているのであります。

②

かの欧米のキリスト教国、これをご覧なさい。彼らは内にあっては十字架の前に頭を下げておりますけれども、ひとたび国際問題に直面致しますと、キリストの信条も慈善博愛も一切蹴散らかしてしまって、弱肉強食の修羅道に向って猛進をする。これが即ち人類の歴史であり、奪うことの出来ない現実であるのであります。この現実を無視して、ただいたずらに聖戦の美名に隠れて、国民的犠牲を閑却し、曰く国際正義、曰く道義外交、曰く共存共栄、曰く世界の平和、かくのごとき雲を摑むような文字を並べ立てて、

そうして千載一遇の機会を逸し、国家百年の大計を誤るようなことがありましたならば、現在の政治家は死してもその罪を滅ぼすことは出来ない。

③

歴代の政府は国民に向ってしきりに精神運動を始めている。精神運動は極めて大切でありまするが、精神運動だけで事変※の解決は出来ないのである。いわんやこの精神運動が国民の間にどれだけ徹底しているかということについては、この際政府としても考え直さねばならぬことがあるのではないか。例えば国民精神総動員なるものがあります。この国費多端の際に当って、ずいぶん巨額の費用を投じているのでありまするが、一体これは何をなしているのであるか私どもには分らない。この大事変を前に控えておりながら、この事変の目的はどこにあるかということすらまだ普く国民の間には徹底しておらないようである。聞くところによれば、いつぞやある有名な老政治家が、演説会場において聴衆に向って今度の戦争の目的は分らない、何のために戦争をしているのであるか自分には分らない、諸君は分っているか、分っているならば聴かしてくれと言うたところが、満場の聴衆一人として答える者がなかったというのである。ここが即ち政府として最も注意をせねばならぬ点であるのである。

④

ことに国民精神に極めて重大なる関係を持っているものであって、歴代の政府が忘れているところの幾多の事柄があるのであります。例えば戦争に対するところの国民の犠牲であります。いずれの時にあたりましても戦時に当って国民の犠牲は、決して公平なるものではないのであります。即ち一方においては戦場において生命を犠牲に供する、あるいは戦傷を負う、しからざるまでも悪戦苦闘してあらゆる苦艱に耐える百万、二百万の軍隊がある。またたとえ戦場の外におりましても、戦時経済の打撃を受けて、これまでの職業を失って社会の裏面に蹴落とされる者もどれだけあるか分らない。しかるに一方を見まするというと、この戦時経済の波に乗って所謂殷賑産業なるものが勃興する。あるいは「インフレーション」の影響を受けて一攫千金はおろか、実に莫大なる暴利を獲得して、目に余るところの生活状態を曝け出す者もどれだけあるか分らない。戦時に

当ってはやむを得ないことではありますけれども、政府の局にある者は出来得る限りこの不公平を調節せねばならぬのであります。

しかるにこの不公平なるところの事実を前におきながら、国民に向って精神運動をやる。国民に向って緊張せよ、忍耐せよと迫る。国民は緊張するに相違ない。忍耐するに相違ない。しかしながら国民に向って犠牲を要求するばかりが政府の能事ではない。これと同時に政府自身においても真剣になり、真面目になって、もって国事に当らねばならぬのでありませぬか。しかるに歴代の政府は何をなしたか。事変以来歴代の政府は何をなしたか。二年有半の間において三たび内閣が辞職をする。政局の安定すら得られない。こういうことでどうしてこの国難に当ることが出来るのであるか。畢竟するに政府の首脳部に責任観念が欠けている。身をもって国に尽くすところの熱力が足らないからであります。畏れ多くも組閣の大命を拝しながら、立憲の大義を忘れ、国論の趨勢を無視し、国民的基礎を有せず、国政に対して何らの経験もない。しかもその器にあらざる者を拾い集めて弱体内閣を組織する。国民的支持を欠いているから、何ごとにつけて

も自己の所信を断行するところの決心もなければ勇気もない。姑息偸安、一日を弥縫するところの政治をやる。失敗するのは当り前であります。

事変以来我が国民は実に従順であります。言論の圧迫に遭って国民的意思、国民的感情をも披瀝することが出来ない。ことに近年中央地方を通じて、全国に弥漫しておりますところのかの官僚政治の弊害には、悲憤の涙を流しながらも黙々として政府の命令に服従する。政府の統制に服従するのは何がためであるか、一つは国を愛するためであります。また一つは政府が適当に事変を解決してくれるであろうこれを期待しているがためである。しかるにもし一朝この期待が裏切らるることがあったならばどうであるか、国民心理に及ぼす影響は実に容易ならざるものがある。しかもこのことが、国民が選挙し国民を代表し、国民的勢力を中心として解決せらるるならばなお忍ぶべしといえども、事実全く反対の場合が起こったとしたならば、国民は実に失望のどん底に蹴落とされるのであります。国を率いるところの政治家はここに目を着けなければならぬ。

※事変：日華事変（当時の日本政府が定めた公称は『支那事変』）。一九三七年（昭和一二年）、盧溝橋事件をきっかけに始まった日中間の長期的かつ大規模な戦闘。

斎藤隆夫（一八七〇―一九四九）但馬室埴村（現・兵庫県豊岡市）の農家に生まれ、苦学して弁護士となる。米エール大学に留学。帰国後、四二歳にして衆議院議員選挙に初当選。以来当選一三回。戦前は立憲国民党、憲政会などに所属。堂々たる弁舌で政治のあるべき姿を説き続けた。本演説の他にも、軍部の横暴を批判し、政治の堕落を追求した「粛軍演説」（一九三六年）が有名。

烈伝　斎藤隆夫

施政者を痛撃する論説

男の本懐とは何だろう、と思うことがある。家族を守り育て、ささやかな幸福を享受するのも良いだろう。仕事に生き、金儲けに走るのも悪くはない。だが、たった一度の人生である。理想を追い求め、危険を顧みることなく命を張り、世のため、人のためにその身を捧げる男前がいてもいい。周囲から嘲笑されようとも、志半ばでのたれ死にしようが構うものか。こうした不器用だが誠実な輩の屍の上に、我々の歴史、文明というものは築かれて来た。

斎藤隆夫という男の、筋の通し方は尋常ではなかった。一八七〇年（明治三年）八月一八日、兵庫県出石郡室埴村字中村（現・豊岡市）の小規模農家に生まれた彼は、何が何でも学問で身を立てたいという、まるで向上心の塊のような少年であった。村一番の秀才と云われた隆夫は、一三歳で京都西本願寺の付属学校であった弘教講学舎に入学するが、学業水準が低いと学校側に舎則の改正を迫り、拒否され退学。一旦、実家へは戻ったものの一四歳の春には、学業を修めたい一心で家出する。

「しかし何としても百姓は嫌いである。一生百姓で暮らすなどはとても堪えられない」。現代とは